

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第二話 男爵さま

「あの方はどなた？」わたしがたずねた。「どつしていつもこちらに背中を向けて一人で座つていらつしやるのかしら？」

「あらいやだわ！」お役人の奥さんが小声でいった。「あのお方は、男爵さまですよ」

お役人の奥さんはこりもしないでわたしを見ている。しかも、うつすらと軽蔑の色まで浮かべて そんなことちょっと見ればわかりそうなものなのに、とてもいいかげんなまなざりだ。

「まあ、なんてお気の毒な方かしら。すきこのんで男爵さまにお生まれなつたわけではないでしょうに」わたしは続けた。「男爵さまにお生まれになつたからといって、知的な交際を楽しむ権利まで奪われていってことはないと思つけれど」

もし、フォークを握っていなければ、お役人の奥さんはここで十字を切っていたらう。 「こんなことを言つたつてあなたにはわからないでしょうけど、あの方は最も高貴な男爵さまのお一人なのよ」

何を言つても無駄とあきらめたのか、お役人の奥さんはわたしから顔をそむけると、左隣にいた医者のお奥さんに話しかけた。

「またオムレツの中が空っぽだわ カラッポ」お役人の奥さんは不服そうに言った。「もうこれで三度目よ！」

わたしは最も高貴な男爵さまにもう一度目を向けた。男爵さまはサラダを食べていたレタスの葉を一枚丸ごとフォークに刺して、ゆっくりと、まるでウサギのようにゆっくりと飲み込んでいた なんておかしいな食べ方だろう。

男爵さまは背が低くて痩せていた。髪は薄い、ほほひげをたくわえた顔はいくらか黄ばんでいるようにみえた。黒いサージのスーツに、目の粗いこわごわした麻のシャツを着て、黒いサンダルに、見たこともないような大きな黒ぶちメガネをかけていた。

気がつくとか向かいの席にいた高等学校の先生が、わたしを見てにやにやしている。

「奥さん、ここにいていい目の保養になるでしょう……もちろんです、いいところ、はめったにありませんからね。夏の初めには、わざわざスペインの宮廷からおいでになったという婦人もいたんですよ。肝臓を患っておられましてね。いえね、よく一緒にしましたもんですよ」

わたしは嬉しそうな顔をしておとなしく先生の話を聞いていた。

「お国のイギリスでは、上流の方々が『保養所』に泊まるなんてことはないんですよ」

「ええ」わたしは男爵さまから目を離すことができなかった。まるで小さな黄色いカイコのようだ。

「男爵さまも毎年いらっしゃいますよ」先生は続けた。「なんでも神経を病んでおいでです、ですけど、いまだにだれともお話にならないんですよ。いまのところは、ですがね」彼はにやりと笑った。

この人の考えそうなことぐらいくらいすぐに察しがついた。たぶん、男爵さまの沈黙が破られる、目のくらむような場面を思い描いているのだろう。ある日、男爵さまとのあいだでかわされる慇懃な挨拶。「この高貴なお方にお譲りする読みさし新聞。なん世代にもわたって語り継がれていく」という言葉。

ちょうどその時、ドイツ兵のような恰好をした郵便配達夫が、手紙をもって食堂に現れた。わたし宛の手紙をミルクプディングのなかにほおってよこすと、そのままウエイトレスの方をむいて小声でなにか言った。ウエイトレスはあわてて奥に引っ込んでいった。するとかわりに支配人が出てきて、持ってきたトレイに絵葉書載せると、うやうやしく頭を下げて、男爵さまのところへ持っていった。

わたしはというと、ここで二十五発ばかり礼砲を鳴らしてもらいたい気分だった。

食事のおわりにコーヒーが運ばれてきた。男爵さまは砂糖の塊を三つとった。しかしカップに入れたのは二つだけで、三つ目の塊はハンカチにくるんで上着のポケットにしまいこんだ。男爵さまはだれよりも早く食堂にやってくるのに、出て行くのは最後までまっていた。なぜだかわからないが、隣の椅子にはかならず小さな黒い革の鞆が置いてあった。

その日の午後のことだった。部屋の窓から外を眺めていると、男爵さまが黒い鞆を提げて、通りを歩いていくのが見えた。街灯の下を通るたびに、何かに怯えたような恰好で、びくんとして身体を縮こめている。まるで街灯に殴られるのを恐れているかのように、そつでなければ、下々の者の卑しさが伝染するのを恐れているかのように……。

それにしても、あの鞆を持っていったいどこへ行くのだろう。カジノや温泉施設でもなさそうだし。サンダルを引っ掛けて歩く姿が何ともわびしげで、気がつく、こちらのほうまで情けない気分になっていた。

夕方になった。サロンにはいつもの顔ぶれがそろっていた。その日に受けた温泉治療のことをさかんに話しあっている。お役人の奥さんは、わたしの隣で九人姉妹の末娘のために、

せつせとシヨールを編んでいた。その娘さんはまだ安心のできる状態ではなかったけれど……
：「いいえ、だいじょうぶよ、きつと無事に生まれるわ」と奥さんはわたしに言った。「あの子の連れ合いは銀行家だね　それも好きでいっしょになった相手なのよ」

八人、いや十人くらいは集まっていたにちがいない。わたしも含めて夫のいる女たちは、下着のことから夫のおかしな癖のことまで、恥ずかしげもなく打ち明け合っていた。娘たちも、夫とらしい男たちの服装や独特な魅力について言い合っている。

「わたしなんか、あれを」先生の奥さんがあたりかまわず大きな声で言った。「灰色のこんな太い毛糸で編むんですけどね、まったくうちの主人ときたら、ひと月で着つぶしまうんですよ」

「それでね」リサが小声で言った。「あの人ったら、ぼくは君といるときが一番幸せなんだ。君のお母さんに手紙を書いて結婚のお許しをもらおうと思ってる」って言ったのよ」

みなほんの少しだけ興奮し、ほんの少しだけ羽目をはずした。

その時、突然、サロンのドアが開いた。見ると男爵さまが立っていた。

一瞬にしておしゃべりが止んだ。

男爵さまはあずあずとピアノのそばまでやってきた。そして、その上においてあった皿の中から、楊枝を一本つまみあげると、またすぐに出て行った。

ドアが閉まったとたんにどつと歓声が上がった！　男爵さまがサロンに姿を現したのはこれが初めてだったのだ。

まったく何が起こるかわからない！

数日がたち、やがて数週間が過ぎていった。わたしたちはあいかわらずいつもの顔ぶれで過ごしていた。しかしそのあいだも、メガネの重みに耐えかねたように、うつむきがちに歩く小柄な男爵さまの姿が、わたしの頭から離れることはなかった。黒い鞆とともに姿を現し、黒い鞆とともにどこかへ消えていく　わたしの知っているのはただそれだけだった。

そんなある日のこと、わたしたちはペンションの支配人から、男爵さまが明日おたちになるそうです、と聞かされた。

「なんですって！」「わたしは思った。」「男爵さまが帰ってしまうなんて　このまま何も言わずにいなくなってしまうなんて！　せめてお役人の奥さんや、陸軍少尉の未亡人には一言くらいの挨拶があっても……」

その日は夕方から土砂降りになった。わたしは郵便局に出かけていた。傘を持っていないだったので、ぬかるんだ道走って帰るしかなかったのだけれど、なかなか思い切りがつかなくて階段のところできずきずきしていると、下の方から蚊の鳴くような声が聞こえてきた。

わたしは声のするほうを見た。すると男爵さまが黒い鞆と傘をもって立っていた。これは夢なのだろうか？　これは現実なのだろうか？　男爵さまが傘に入っていくませんか、と声をかけてくれたのだ。わたしはかなり愛想よく、ほんの少しだけためらう振りをしてから、

失礼のないように男爵さまの好意をお受けした。わたしたちは並んでぬかるんだ道を歩いていた。

それにしても、こうして二人で一つの傘に入っていると、なんだか妙に親しくなったような気がするから不思議だ。

ちょうど、男の人の上着にブラシをかけてあげるときのように　ほんの少し大胆に、それでいてどこか無邪気な気持が湧いてくる。

わたしには男爵さまにどうしても尋ねてみたいことがあった。どうしていつもひとりであるのですか？　どうしていつもその鞆を持っているのですか？　いつもなにをしているのですか？　ところがわたしよりも先に、男爵さまのほうから「自分のことを話し始めた。

「わたしは心配性で」「男爵さまが言った。「荷物が湿っほくなるんじゃないかと気が気じゃないもんですから、こうして鞆に入れていつも持ち歩いているんです　それほどたくさんあるわけではないし　使用人はあてになりませんから」

「賢明なお考えだと思いますわ」わたしはそう答えた。そして思い切って尋ねた。「あの、どうしてわたしたちのテーブルにいらしてくださいませんか」

「わたしはひとしばい食べるほうでしてね男爵さまは夕闇のかなたをじっと見つめながら言った。「たっぷり食べておかないと腹がもちません。だから二人分注文して一人でのんびりと食べることにしているんです」

いかにも男爵さまらしいご立派なお答えのような気がした。

「一日中何をなさっておいでですか？」

「なに、部屋にいても食べているだけです」その声が、おしゃべりはもうこれで終わりにしましょう、といているように聞こえた。もしかしたら、わたしを傘に入れたことを後悔しているのかもしれない。

二人が一緒に戻ったので、宿の中はひっきりかえったような大騒ぎになった。

わたしは階段を半分ほど駆けあがったところから、まだ下にいる男爵さまに向って大きな声でお礼を言った。

男爵さまもはっきりと答えてくれた。

「なんの、あれしきのことであれば！」

その晩、高等学校の先生は花束を持って、そして、お役人の奥さんは、赤ん坊の帽子の圖案を口実に、わざわざわたしの部屋まで訪ねきたのだった。

翌日、男爵さまの姿はどこにもなかった。

ドイツの栄光、かくて去りゆく！